

海洋科学調査船「^{トン} ^{ファン} ^{ホン}東方紅」号

岸本文男（鈦床部）

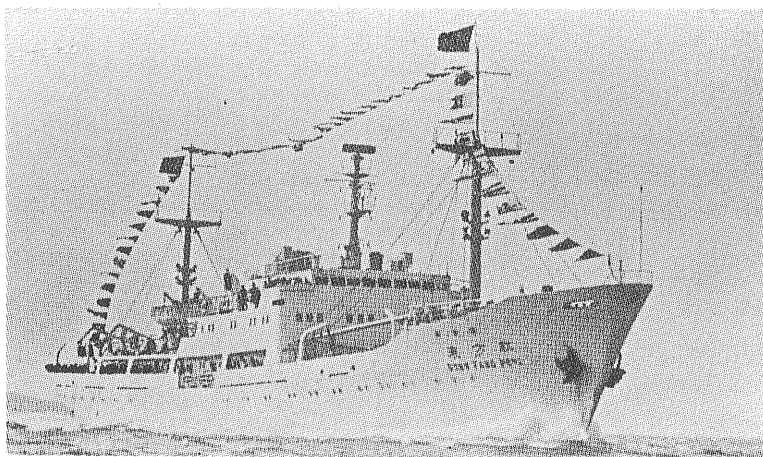
話は旧聞に属するが 日本ではまだ紹介されたことのない中国の海洋科学調査船「^{トンファンホン}東方紅」号について お話しよう。

この調査船は1966年1月に上海の滬東造船所で進水した中国の自力設計・建造になる初の総合的な遠洋海洋科学調査船である。排水量は2,500tで 我が国最新の地質調査船「白嶺丸」（1973年11月進水）よりも700tほど大きい。

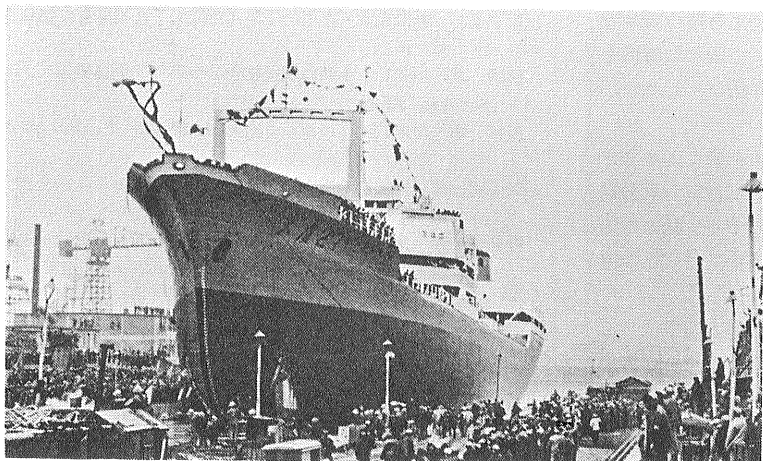
1949年10月1日の新中国誕生以前の中国では 中国征

服を目論む国々が 沿岸水域の調査を繰り返したくらいで 中国自体の海洋科学研究は ほとんど空白状態であった。

しかし 新中国になってから 長い海岸線をもっている国の当然のこととして近代的海洋科学の発展が重視され ソ連の援助の下に 1951年山東大学（^{シヤントン} 済南）が再建されるに当って海洋学部が開設され 青島に海洋研究所が新設された。そして同時に近海海洋科学調査船もソ連の技術を得て次々に建造され 就航していった。そ



第1図
「東方紅」号の英姿



第2図 上海滬東造船所 貨客船「第12大慶」号の進水



第3図 「東方紅」号での自動験潮機の投設作業

の成果をうけ 1959年頃に 青島の山東海洋学院が誕生した。北京大学（北京）^{ペキン} 湖南大学（長沙）^{フナン} 南京大学（南京）^{ナンキン} 浙江大学（杭州）^{チョウシヤ} 重慶大学（重慶）^{チンチン} 西
北大学（西安）^{シヤン}などの地質学部や地質学科でも 北京石
油学院（北京） 北京地質学院（北京） 山東地質学院
（青島）などでも海洋地質学の講義がその頃から次第に
始まっていったようである。

かくして遠洋の科学調査の要望が急激に高まり 「東
方紅」号の自力建造となった。

機関はジーゼルで 主と副を備え 電動機は電圧もサ
イクル数も非常に安定しているという。 また レーダ
ー航行 船内外の通信 空気調節 深海投錨などの設備
も整っている。

船内の実験室は10余室。 総合的な海洋科学の調査研
究が可能で 海洋科学専攻の学生を収容できるようにも
なっている。 実験室には中国製だけでなく 外国製の

当時最新の測定・実験機器も備えていると聞く。 さら
に機器の修理組立室とか 暗室 各種貯蔵室 倉庫も付
設されている。

甲板には種々のウィンチやクレーンがあり 観測に不
便はないようである。

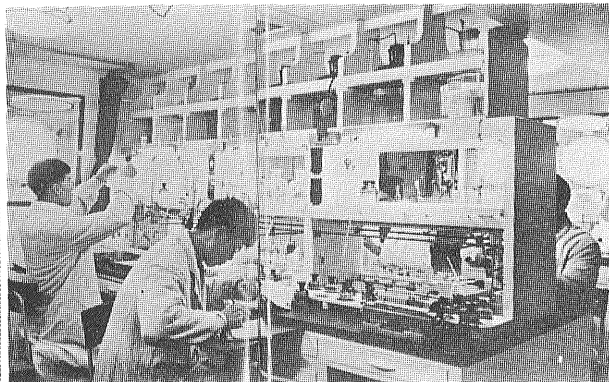
高速を誇っており 試験航海では風速20数mの中を24
時間 その高速で航行し 別に船体にも機関にも異常は
なかったと報告されている。

現在 「東方紅」号は 海洋学 気象 物理 化学
生物 海底地質 水産資源などの調査研究に 青島をバ
ースとして活躍している。 我が国を来訪する日があれ
ばよいのだが。

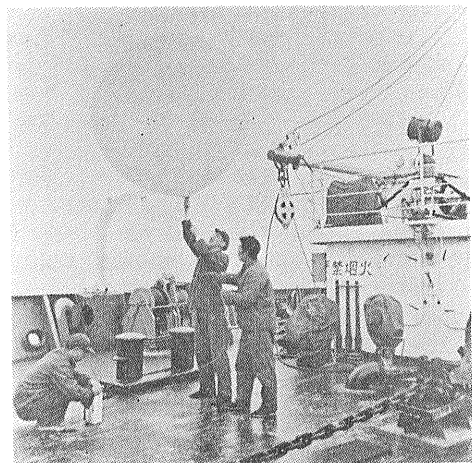
なお 雑誌「人民中国」の1977年11月号に 遠洋海洋
科学調査船「第5向陽紅」号と「第12向陽紅」号の帰港
の記事がある。 さらに 海洋と海洋地質の研究が充実
しつつあるとみてよいだろう。



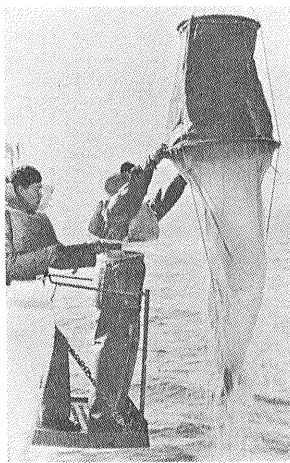
第4図 底質 試料を採取する



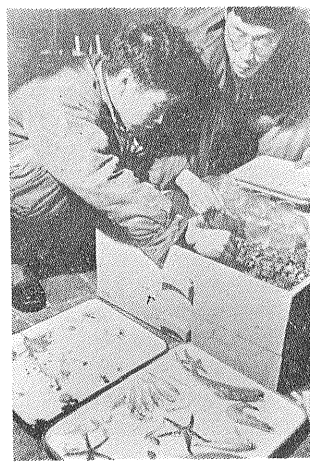
第5図 船内の化学実験室。 現在では計算機も新型になっていると思うのだが



第6図 毎日 朝・夕2回 ラジオゾンデをとばす



第7図 プランクトンの採取



第8図 海底生物の分類をする生物学
の研究者たち